

Wonders of the Great Rocks

出雲 神話ゆかりの気高い姿

道の脇に巨石がたたずんでいた。高さ10メートルを優に超え、草木やコケをまとった巨大な岩塊を地元では「山の神」と呼ぶ。上部がせり出しているので覆いかぶさってくるような迫力がある。「多くの人を案内したが、誰もが大きさと存在感に圧倒される」と話すのはこれまで国内1500カ所、海外50カ国以上の巨石を訪れたフォトグラファーの須田郡司さん。2013年に島根県出雲市に移り住み、「出雲の聖なる石を訪ねる」と題したツアーを催す。

「何度も通った道なのに気づかなかつた。異空間のような雰囲気を感じた」と2年前に参加した出雲市の40代女性は振り返る。山の神は古い時代から人々にまつられてきたとされる。手前には御陵神社と呼ぶ鳥居と小さな社があり、お金とお神酒が供えられていた。コロナ禍でやって来る人が増えたのだらう。先行きの不安から、平穏を祈った、願ったりしたのか。

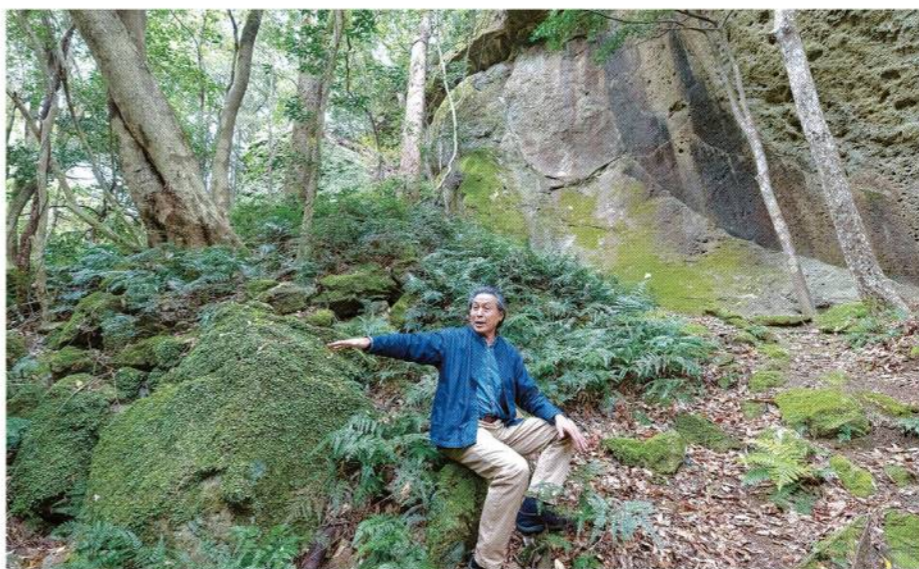
砂浜にボツンと巨石のシルエット――。出雲を代表する景色といえば、この稲佐の浜にある弁天島の姿だろう。旧暦10月には出雲大社の神迎えの神事の舞台になる。巨石・奇岩は国内各地に散在する。大きいだけではない。人や動物の姿に似ているものもある。黒かったり、白かったり。丸かったり、とがっていたり。

たり。共通するのは一目で人を圧倒する存在感を持つこと、古くから磐座として信仰されてきたものもある。数ある巨石の中でも特に出雲のものには霊験が多くありそうな気がする。古事記など神話に関係するスポットが多いからか。巨石ハンターとして知られる須田さんのツアーはこうした巨石・奇岩を巡る。

例えば、ヤマタノオロチ退治で知られるスサノオノミコトとその妻子をまつる須我神社(島根県雲南市)。本殿から2キロほど離れた山中に奥宮があり、「夫婦石」と呼ぶ高さ2.5メートルの3つの巨石が鎮座する。「昔から『二宮詣り』という習わしがあり、6割ほどの人が本殿と奥宮の両方にお参りする。奥宮は上がると分かるが結構きつい」と宮司の勝部和承さんは説明する。その結構な山道を次々と人が上がってくる。息を切らし、汗をふきながら。

夫婦岩は丸く、柔らかな印象だ。スサノオといえは荒々しい神さまの代表だが、ここでは宮を築き、妻と暮らし生活をなした。和歌も詠んだ。円満だった生活を石が映しているようだ。木漏れ日が当たり、キラキラと神々しい。東京から来た30代の女性は「3つの巨石が仲良く寄り添うのは珍しい。身が清められた」と満足そう。触ったり、抱きついたりする人もいるとか。

スサノオ関連は韓竈神社(出雲市)などにもあるが、他の神さまとゆかりの巨石も多い。須田さんのツアーに2度参加した和歌山市在住の寺倉美沙さん



知る人ぞ知る御陵神社の「山の神」。巨石ハンターとして知られる須田郡司さんも大きさに圧倒されたという(島根県出雲市)



雨乞いの神さまとして知られる立石神社では巨石の前で直接拝む。訪ねたときも雨が降り始めた(島根県出雲市)



スサノオノミコトと妻子をまつる夫婦岩。大中小3つの巨石が寄り添う。山中にあり、神秘的なムードが漂う(島根県雲南市)

は「経島がナンバーワン。日本を外敵から守っているイメージがある。見る角度や天候によって表情が変わるのもステキ」と言う。経島は日御碕神社(出雲市)の元宮でスサノオの姉のアマテラスオオミカミをまつる。大小2つの岩からなる周囲400メートルの島だ。一般の立ち入りは禁止なので遠くから眺めるしかないが、寄せる波や強い風に耐える黒い姿は気高く、森の中にある巨石とひと味違う。

出雲大社の御祭神であるオオクニヤシノミコトの孫にあたる農耕の神、タ



須我神社宮司の勝部和承さん。奥宮に行く「すがすがしい気分になる」と話す(島根県雲南市)

キツヒコノミコトをまつるのが立石神社(出雲市)だ。鳥居も拝殿もなく、あるのは地元で「たていわさん」と呼ぶ石のご神体だけ。山道を少し下ると巨大な塊が突如として現れる。3つに分かれ、高さは12メートル、幅は最大で26メートルに達する。「出雲ではここが最もすごいと思った」と須田さん。ひっそりとしずまる巨石は、うっそうとした雰囲気も手伝って神秘的に映る。

正面に御幣が立てられ、そこで祈るのだろう。昔から雨乞いの神さまとして信仰され、今も日照りときには行政の人が神頼みに来るという。周辺の美化やPRに取り組む佐香コミュニケーションセンター長の服部昌幸さんは「全国から人が来るようになった。よそにはない巨石があるので、皆さん感動して帰っていく」とうれしそう。入り口に設けた記帳台のノートによれば、18年に100人ほどだった参拝客は、その後2.3倍に増えた。

人が巨石にひかれる理由を、宗教哲学者の鎌田東二さんは「永続性の希求や異世界への好奇心」と表現する。寿命が限られ、はかない存在の人間は、長い年月にわたって存在するものにあこがれに近い思いを持ってきた。その身近な存在が巨石だという。そして奇異な姿に異世界的なものを感じ「現実世界と魂の世界とを媒介する存在として信仰の対象となってきた(鎌田さん)。巨石に畏敬の念を抱き、何かを変えようという力を借りたいと思う人が多いのは、昔も今も変わらない。